

そして美術館は完璧な検閲装置となる

太下 義之

同志社大学経済学部教授

超大型美術館「M+」の開館

香港の西九龍文化区に立地する大規模な美術館M+が、2021年11月12日にオープンした。M+の敷地面積は25,000㎡で、延床面積65,000㎡、18階建の巨大な建物の中には、33のギャラリー（展示スペース：17,000㎡）と3つの映画館、研究センター等があり、ビクトリアハーバーを見下ろす象徴的な存在となりつつある。このM+の建物は、ロンドンのテート・モダンや北京オリンピックのメインスタジアムであった北京国家体育場（通称「鳥の巣」）の設計で世界的に有名な建築家ユニットHerzog & de Meuronが、九龍駅とユニオンスクエア開発等の設計を担当したTFP Farrellsと、モード学園コクーンタワー（東京都新宿区）等の構造設計を担当したArupと共に設計した。

おおした よしゆき

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻博士後期課程修了。博士（芸術学）。専門分野は、文化政策、創造都市、表現の自由。森ビル株式会社、三和総合研究所（現・三菱UFJリサーチ&コンサルティング）主任研究員、同・主席研究員、独立行政法人国立美術館理事等を経て、2018年4月より現職。

著書に『アーツカウンシル アームズ・レングスの現実を超えて』（水曜社、2017年）、2008、『著作権保護期間延長は文化を振興するか？』（共著、勁草書房、2008年）、『TOKYO1 / 4 と考える オリンピック文化プログラム』（共著、勉誠出版、2016年）など。

M+で巨大なのは建物だけでなく、そのコレクションも6,410アイテム以上と大規模であり、その中核を構成しているのが、「M+ Siggコレクション」である。「M+ Siggコレクション」は、スイスのコレクター Uli Siggのプライベート・コレクションがM+に寄贈されたものであり、絵画、版画、彫刻、パフォーマンス、写真、デジタルアートを含む幅広いスタイルと媒体を網羅した1,510点の作品群である。同コレクションは、文化大革命の末期の1972年から2012年までの現代中国の歴史の中で最も文化的にダイナミックな40年間にわたるアートの発展を記録しており、世界でも最大かつ最も包括的な現代中国美術のコレクションの一つと評価される¹。

「M+ Siggコレクション」のうち寄贈された1,463作品は、サザビーズによる控え目な鑑定で、13億HKD（1.63億USD）の評価額であった。M+は、この寄贈に加えて、さらに47点の作品を1億7,700万HKD（2,280万USD）で購入することに合意したとのことである²。

この「M+ Siggコレクション」の特徴は、中国の現代美術の先駆者と見なされるアンダーグラウンドの芸術集団であるNo Name GroupやStars Art Groupの作品のほか、中国政府を公然と批判するアーティストAi Weiwei（艾未未／アイ・ウェイウェイ、1958年中国・北京生まれ）の26作品が含まれていることである。そして現在、このAiの作品が大きな議論の焦点となっているのである。



出所：M+ 〈<https://www.mplus.org.hk/en/announcement/>〉

Ai Weiweiの作品を巡る議論

直近の一連の議論は、2021年3月に実施されたM+のメディア向けプレビューに端を発している。このプレビューにおいて、M+Siggコレクションに含まれているAiの作品「Study of Perspective」が提示されたのである。この「Study of Perspective」は、ワシントンのホワイトハウス、パリのエッフェル塔、ベルリンのライヒスタークなど、世界の重要な施設やランドマーク、モニュメントに向けて左手の中指を立てている写真のシリーズ(制作：1995年～2017年)である。そして、同シリーズ中の一枚が、北京の天安門広場に向けてAiが中指を立てている作品である。

以下において、香港での完全に独立した非営利の英語新聞であるHongKong Free Press (2015年設立)の記事を中心として、Aiの作品公開を巡る議論の推移を整理してみたい。

2021年3月16日、反体制派の中国人アーティストであるAiの作品を含むメディア・プレビューを

開催したとして、親中派の地元政治家のグループが、M+が国家安全保障法に違反したと非難し、同美術館を警察に告発した³。

翌3月17日、親中派のEunice Yung (容海恩)議員は「(アイ・ウェイウェイの作品を含むM+)の多くの作品が国家に対する憎悪を広めている」「香港政府は(M+)のコレクションを検閲する意思はあるのか?」及び「こうした反中国の感情の挑発を防ぐため、政府は何をするつもりなのか?」と議会で質問した。これに対して、Carrie Lam (林鄭月娥)行政長官は、「(香港は)文化的及び芸術的表現の自由を尊重している」と回答しつつも、香港政府当局は国家安全維持法(後述)の違反に対して「厳重な警戒態勢」とっており、展覧会の主催者にとって、「越えてはならない一線 (red line) は明確に分かるようになるだろう」と付言した⁴。

3月23日、こうした状況の中でSiggは声明文を西九文化区に送った。その中でSiggは「現代アートは現実を批判し、傷口に指を入れることさえあるかもしれない」「現代アートはあなたの良き友人ではない。現代アートはあなたがこの世界の現実

図2 「Study of Perspective: Tian'anmen (天安門)」(1997)の画像が非表示で「M+」と表示されているM+のオンライン・コレクションのスクリーンショット



出所：M+ 〈<https://www.mplus.org.hk/en/collection/>〉

に対して開放的であり、その分析や批評に関心を持つことを求めてくる」「このように開放的でなければ、現代アートを鑑賞することはできない」と記述している⁵。Siggは、これらの現代アートを香港に展示することによって、中国の新しい世代の意識に働きかけることを意図したのではないか。

実はSiggは、遡ること5年前の2016年のインタビューにおいて、コレクションの寄贈の交渉段階において「香港と中国本土では言論の自由の程度が非常に異なるのだから、香港にコレクションを提供するべきである」と香港政府が強く主張したとの内実を明らかにするとともに、「言論の自由や芸術の自由が私のコレクションの状況を変えたり、展示できるものを制限したりする影響がないことを願う」と語っている⁶。しかし、残念ながらSiggの期待は裏切られたようである。

3月29日、西九文化区のHenry Tang（唐英年）区長は、「国家安全保障局が法律に違反していると考える作品があれば、私たちは法律に従って行動する」及び「警察に設置される新しい国家安全保障部門による審査を歓迎する」と記者団に語っ

た。この発言は、法に違反していると判断されるAiの作品は、M+において展示する予定がないという声明である⁷。なお親中派の新聞The Standardによると、この記者会見でTang区長はAiの作品を「低俗(vulgar)」と評価したとのことである⁸。

そして、本稿執筆時点(2021年11月16日)でM+のオンライン・コレクション(Collection Online)においては、アイ・ウェイウェイの28作品の情報が公開されている。ただし、このうち、「Study of Perspective: Tian'anmen (天安門)」(1997)と「Map of China」(2003)の2作品については、画像が公開されていない。

一方で、Aiが世界の政治的な施設に中指を突き立てている「Study of Perspective」シリーズの作品である「Study of Perspective: White House (ホワイトハウス)」(1995)と「Study of Perspective: Bundeshaus Bern (スイス・ベルンの連邦議事堂)」(1999)の画像はふつうに公開されている⁹。

なお、Aiの作品を巡る動向と並行して別の事件も生じた。助成金の配分と各分野の芸術振興を任

務とする香港アーツカウンシルの27人のメンバーのうち、4名が2021年5月から8月にかけて次々と辞任したのである。この辞任は、中国の国営新聞であるTaKungPaoとWenWei Poが、彼(女)らを「トラブルメーカー」であるとして非難したこと、また、国家安全保障法に違反した可能性がある文化団体に過去3年間で約1500万香港ドルの資金を分配したとして、カウンシル自体を非難した記事が原因と見られている¹⁰。

反体制派アーティストAiの誕生

さて、このようにAiの作品が検閲されるようになる背景として、その前触れとなるような事象を確認することができる。Aiの作品およびその人物そのものは、今までもさまざまな物議を醸してきたのである。

そもそも2008年に開催された北京オリンピックの準備段階においては、Aiは中国を代表する国際的なアーティストと位置付けられていた。それゆえ、北京オリンピックの主会場である北京国家体育場(鳥の巣)の建設にあたり、芸術顧問として設計者のスイス人建築家ユニットのヘルツォーク&ドムロンとの共同制作を行ったわけである。

Aiと国家との関係が大きな転機を迎えたのは、オリンピックと同年の5月12日に発生した四川大地震である。この大地震によって、5千人以上の学童が死亡したとされるが、公式の発表はなく、正確な数は現在も不明である。他の年代と比較して不釣り合いに多くの死者が学童に生じたのは、地元の役人が個人的な利益(汚職)のために、学校建築の資材の削減を黙認したせいとされる。この四川大地震における人災をテーマとして、Aiは一連のアートワークを展開するが、その中で最も重要な作品が、150トンもの鉄筋が積み重ねられた“Straight”(2008-2012)である。地震の後、リサイクル用にとっておかれた、被災で曲がりくねってねじれた鉄筋をAiは密かに購入して、これらの鉄筋を手作業で丹念にまっすぐにして、建設前/地震前の状態に戻したのである。そして、これらの鉄筋コ

ンクリート構造物の建設に使用される鉄筋は、「豆腐建築」と呼ばれる劣悪で拙速な手抜き工事を想起させるアートになった(Royal Academy of Arts 2015:129)。そして、この直接的な政府批判によって、Aiは国家の激しい怒りを受ける側に位置づけられることになったのである。

その後Aiは2011年4月3日に、香港に向かう途中で北京の空港にて警察に止められ、それから拘禁理由を正式に明らかにされないまま、窓のない部屋で二人の警備員に注意深く監視されて、81日間も拘禁されることになった。なお、Aiは解放後に、拘禁されたシーンを再現した“SACRED(祀られて)”と題したインスタレーションを制作し、2013年のヴェネツィア・ビエンナーレに出品した¹¹。転んでもただでは起きない反体制の芸術家魂が感じられる。

2014年4月30日には、「上海CCAA中国当代芸術賞15年展」において、評選委員会委員としてのAiの名前が、開始わずか20分前に削除された。さらにその一ヶ月後の5月23日、北京798ユールンズ現代アートセンター UCCAで開催された展覧会においても、出品アーティストであったAiの名前と写真がカタログから消された。Aiはこのことに抗議して作品を撤収した(牧2014:155)。

その後、2016年8月には、寧夏回族自治区に位置する銀川市で開催された2016年の「銀川ビエンナーレ」にて、参加予定であったAiの作品が締め出される、という事件が起こる。Aiの作品が「政治的にデリケートな案件」であることが理由だとAiは述べている。ちなみに、この銀川ビエンナーレは、中国の国際戦略である「一帯一路」戦略において、最初の文化振興拠点を設立する予定であったとのことである¹²。

香港国家安全維持法がもたらす問題

以上のように、2008年以降のAiは反体制派のアーティストと位置付けられてきた経緯があるのだが、M+のオープニングに向けて、特にAiの作品に注目が集まっている背景には、中華人民共和国

香港特別行政区国家安全維持法（通称「国家安全維持法」。以下、「国安法」）が2020年6月に施行されたことを指摘できるだろう。

世界最大の国際人権NGOであるAmnesty Internationalは、「国安法が施行された翌日（2020年7月1日）に、警察は国安法違反の容疑の10人を含む300人以上の抗議者を逮捕した。それ以降、香港政府は、表現の自由、平和的な集会および結社の権利を行使したという理由だけで、国安法の下で市民の逮捕および起訴を繰り返してきた」及び「中国の中央当局の定義に従った『国家安全保障』の定義は包括的で、明確さと（どのような場合に処罰されるのかという）法的な予測可能性に欠けている。そのため、表現の自由、平和的な集会、結社、自由に対する人権を制限する口実として恣意的に使用されてきた」¹³と報告している。

具体的には、第29条(5)に「様々な違法な方法により、香港特別行政区の居住者は中央人民政府または香港特別行政区政府へ憎悪を喚起し、深刻な結果を引き起こす可能性があること」に関する「罪を犯した者は、3年以上10年以下の懲役刑が科せられ、重大な犯罪の場合は終身刑または10年以上の懲役刑を宣告される」と記述されている。しかし、この「憎悪の喚起」には、共産党に対する批判も含まれているのかもしれない。

またBBCは、国安法の問題点として、「裁判は秘密裏に（第41条）、陪審員なしで（第46条）行うことができる。裁判官は、北京当局に直接責任を負う香港特別行政区行政長官が任命することができる（第44条）。容疑者の保釈が認められない（第42条）」及び「捜査から判決、刑罰に至るまでの事件全体を本土当局に簡単に引き渡すことができる（第56条）」¹⁴と具体的に指摘している。

この国安法が施行されているかぎり、もしもM+でAiの作品を公開した場合には、館長及び担当者が当局に逮捕される懸念はかなり高い確度のリアリティを有しているものと想像される。

美術館は完璧な検閲装置となるのか

以上、概説してきたM+とAiの作品を巡る一連の出来事は、私たちに3つの重要な示唆を与える。

一つは、立地する国・地域の政治思想及び政治体制に美術館が従うことによって、美術館自体が完璧な検閲装置となってしまう懸念があるということである。具体的に、もしもある国家がある特定のアーティストを完璧に検閲しようと考えた場合、国家はこのアーティストの過去の作品できるかぎり収集したうえ、公立美術館において厳重に「管理」、すなわち「隠匿」するという手法をとることもできるのである。「美術館が完璧な検閲装置になる」という危機は、けっしてSFの中での話ではなく、M+において起こっている現実の問題なのである。

もう一点は、そもそもアート作品の展示＝鑑賞（利用）に関する権利や自由は誰に帰属するものなのであろうか、というより本質的な問いかけである。それは、所有者＝美術館であるのか、またはアーティストであるのか、はたまた香港のケースのように国家なのであろうか。この点に関連して、米国の法学者Joseph Lawrence Saxは著書『「レンブラント」でダーツ遊びとは』（1999）において、アート作品等の「所有者による権利」と「公の権利」のバランスに関して論じている。そして、「公の権利」の観点から、たとえ個人が所有する芸術品であったとしても、「破壊や公開拒否を禁止すること」（サックス1999＝2001:17）を提案している。

当然のことではあるが、そもそも美術館（博物館）とは、収蔵品を「公開」するための機関である。ミュージアムに関する国際的な非政府機関のInternational Council of Museums (ICOM) がとりまとめた“Code of Ethics for Museum: ミュージアム倫理規程(2017 Edition)”の「1-4」においては、「管理機関は、博物館とその収蔵品が適切な時間帯に一定の期間すべての人に公開されることを保証すべきである」¹⁵と明記されている。

また、日本全国401の国公立美術館でつくる全国美術館会議は、『美術館の原則と美術館関係

者の行動指針』を2017年12月に策定・発表しているが、この「行動指針6：収集・保存の責務」において、「作品は、公開されて初めて多面的価値を発生させるものである」¹⁶と記述されている。

参考までに図書館の場合、公開及び利用に関する自由はより明確に記されている。日本図書館協会(1979)「図書館の自由に関する宣言」において、「すべての国民は、いつでもその必要とする資料を入手し利用する権利を有する。この権利を社会的に保障することは、すなわち知る自由を保障することである。図書館は、まさにこのことに責任を負う機関である」及び「図書館は、権力の介入または社会的圧力により左右されることなく、自らの責任にもとづき、図書館間の相互協力をふくむ図書館の総力をあげて、収集した資料と整備された施設を国民の利用に供するものである」¹⁷と明記されている。このような図書館に関する原則等を参照しつつ、美術館の収蔵品に関しても、あらためて普遍的なアクセスを担保することを再確認することが必要であろう。

おわりに：反作用としての“M+ Effect”

三つ目の示唆は、検閲による反作用についてである。上述したとおり、2011年にAiは81日間に渡る拘禁をされたが、その終了直前に、尋問を担当した中国の警官は「Aiよ、私たちなしでは、今日、お前はそんなに有名になれなかったのではないか？」とAiに尋ねたそうである。これは極めて象徴的なエピソードである。すなわち、検閲や弾圧が行われることによって、当該アーティスト及び彼(女)らの名はより知れ渡ることとなり、また、彼(女)らの表現をより深化させ、強靱にするという反作用が働くということを示唆しているからである。これは、今回の事件になぞらえて“M+ Effect”とでも呼べるのではないか。Ai自身も、次のように語っている。「表現の自由は、闘争の中で現れるべきです。今日の香港の状況は、香港のアーティストとその芸術的表現に新たな挑戦をもたらしていると思います。この種の挑戦に立ち向かうことができるアーティストが本物のアーティストなのでしょう」。そしてさらに、「今日の闘争

の中で現代の香港のアーティストが彼ら自身のことば(表現)を見つけるとき、これは彼らの芸術的表現の覚醒となるでしょう」と¹⁸。

はたして、香港のアーティストが「覚醒」する日は、いつ到来するのでしょうか。■

《注》

- 1 M + “M+ Sigg Collection” <<https://www.mplus.org.hk/en/about-the-collection/m-sigg-collection/>>
- 2 Miryam Rodriguez (2012) “ULI SIGG’S GIFT BOLSTERS HONG KONG’S M+ MUSEUM VISION” <<http://artasiapacific.com/News/MajorCollectionDonationToMWestKowloon-CulturalDistrictSFutureMuseum>>
- 3 The Guardian (2021年3月21日) <<https://www.theguardian.com/world/2021/mar/21/hong-kongs-arts-scene-shudders-as-beijing-draws-cultural-red-line>>
- 4 Hong Kong Free Press (2021年3月21日) <<https://hongkongfp.com/2021/03/21/patriot-games-hong-kong-arts-scene-shudders-as-loyalists-circle/>>
- 5 焜新聞 CitizenNews(2021年3月29日) <<https://www.hkcnews.com/article/39752/%E5%B8%8C%E5%85%B3-39776/>>
- 6 Selina Ting (2016) “Dr. Uli Sigg – What if he didn’t donate the Sigg Collection to M+?” <<https://www.cobosocial.com/dossiers/dr-uli-sigg-what-if-he-didnt-donate-the-sigg-collection-to-m/>>
- 7 Hong Kong Free Press (2021年3月29日) <<https://hongkongfp.com/2021/03/29/new-hong-kong-m-art-museum-will-not-show-ai-weiwei-tiananmen-photo-official/>>
- 8 The Standard (2021年3月30日) <<https://www.thestandard.com.hk/section-news/section/11/228848/>>
- 9 M+ <<https://www.mplus.org.hk/en/collection/>>
- 10 Hong Kong Free Press (2021年8月9日) <<https://hongkongfp.com/2021/08/09/hong-kong-arts-development-council-members-quit-after-chinese-state-media-attacks/>>
- 11 Hong Kong Free Press (2016年6月27日) <<https://hongkongfp.com/2016/06/27/in-pictures-5-years-ago-ai-weiwei-was-released-from-detention-in-china/>>
- 12 Hong Kong Free Press (2016年8月25日) <<https://hongkongfp.com/2016/08/25/dissident-artist-ai-weiwei-says-work-was-pulled-from-yinchuan-biennale-due-to-politi>>

- cal-sensitivity/)
- 13 Amnesty International (2021) <<https://www.amnesty.org/en/latest/press-release/2021/06/hong-kong-national-security-law-has-created-a-human-rights-emergency/>>
 - 14 BBC (2020年7月1日) <<https://www.bbc.com/news/world-asia-china-53256034>>
 - 15 ICOM“ICOM Code of ETHICS for Museums” (2017) <https://icomjapan.org/wp/wp-content/uploads/2020/03/ICOM_code_of-ethics.pdf>
 - 16 全国美術館会議 (2017) 『美術館の原則と美術館関係者の行動指針』 <<https://www.zenbi.jp/getMemFile.php?file=file-3-536-file-1.pdf>>
 - 17 日本図書館協会 (1979) 「図書館の自由に関する宣言」 <<https://www.jla.or.jp/portals/0/html/ziyuu.htm>>
 - 18 Hong Kong Free Press (2016年9月19日) <<https://hongkongfp.com/2021/09/18/exclusive-hongkongers-on-the-right-side-of-history-says-artist-ai-weiwei-i-am-proud-very-proud-of-them/>>

《参考文献》

- Royal Academy of Arts (2015) *AI WEIWEI*. Royal Academy of Arts. London.
- サックス, ジョセフ・L (都留重人監訳) (1999 = 2001) 『「レンブラント」でダーツ遊びとは 文化的遺産と公の権利』 岩波書店
- 牧陽一 (2014) 「誰が私の名前を消したのか? : 艾未未 アイ・ウェイウェイ 2014」. 『埼玉大学紀要』 埼玉大学教養学部、50 (1) , 149-166.

